

# 第1回クラシックを楽しむ会

2013年7月21日(日) 19:00~21:30

タイトル：歌劇「椿姫」(ヴェルディ)

会場等：ミラノスカラ座、2007年7月上演、リリアーナ・カヴァーニ演出

楽団等：ミラノスカラ座管弦楽団、同合唱団、同バレエ団、ロリン・マゼール指揮

出演：アンジェラ・ゲオルギウ、ラモン・ヴァルガス、ロベルト・フロンターリ、エンリーコ・コッスッタ他

## 「椿姫」原作者デュマ・フィスとその家系について

曾祖父の侯爵がカリブ海のハイチでプランテーションを営んでいたとき、農場を切り盛りしていた黒人奴隷女性、通称「農家のマリー」に産ませ、奴隷として売り飛ばして後に買い戻した子が祖父のトマ＝アレクサンドル・デュマである。デュマ Dumas 姓はこの「農家の」 du mas に由来する。トマ＝アレクサンドル・デュマはナポレオン軍の陸軍中將にまでなったがナポレオンのエジプト遠征を批判して失脚、祖父の死後ナポレオンの人種差別政策のため遺族は年金支給を拒否された。

このため父アレクサンドル・デュマ・ペール(ペールは「父」)は困窮生活を余儀なくされ学校教育も受けられなかったが「ハムレット」の劇を見て感動して作家を志し、三銃士、モンテクリスト伯等を書いてベストセラー作家になった。劇場も経営して巨万の富を手にし、豪快で派手な生活を繰り広げたが、晩年は浪費のため破産宣告をうけた。2002年になって生誕200年を期にパリのパンテオンに祭られた。人種差別等が原因で100年遅れたものである。

「椿姫」原作者のアレクサンドル・デュマ・フィス(フィスは「息子」)は父アレクサンドル・デュマ・ペールの私生児である。

父アレクサンドル・デュマ・ペールに認知されて最高の教育を受けた。母と引き離され、思春期に受けた周囲の偏見、その後の父親の金で遊び呆けた経験などが作品に影響している。24歳で処女作「椿姫」を父親の七光りで出版し、翌年戯曲化して大成功を収めた。女性解放運動など人権活動家として活躍し、演劇界で絶大な影響力を持つなどしてアカデミー・フランセーズ入りを果たした。



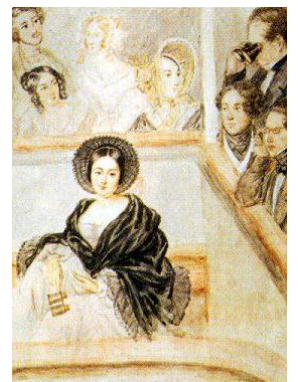
## 小説「椿姫」のモデルについて

小説「椿姫」は娼婦マルグリットと青年アルマンとの悲恋の物語である。

### 娼婦マルグリットのモデル

娼婦マルグリットは実在の女性、1824年生まれの通称マリー・デュプレシ、本名アルフォンシーヌ・プレシがモデルである。極めて不幸な少女時代の後、7人の富豪達から金を絞り取る才色兼備の高級娼婦になった。20歳で知り合ったデュマ・フィスと別れた後、死の前年22歳の時、時代の寵児フランツ・リストに熱を上げたが、不治の病、肺結核のため多額の借金を残して23歳で亡くなった。その死は大きく報道されて有力紙にも追悼記事が載った。

小説、戯曲ではマルグリットが娼婦の生活を捨て一途にアルマンを愛する純愛物語に仕立てているがこれは事実ではない。デュマ・フィスの願望を物語に仕立てたものである。



## マルグリッドのパトロンのモデル

上記富豪の内、不幸な少女に教育を受けさせるなど知性を身に付けさせたギッシュ伯爵ともう一人、ペレゴール伯爵が原作の重要なモデルである。ペレゴール伯爵は銀行家の孫で相続した莫大な遺産をデュプレシに入れあげて破産状態になった。請われるままにロンドンで「娼婦と貴族の正式な」結婚式を挙げデュプレシを「伯爵夫人」にした。デュプレシの死の前年のことである。デュプレシの「本当はフランツ・リストを愛している」の言葉に怒り裁判所に結婚の無効を申し立てて勝訴したが「元伯爵夫人」の虚名が残りデュプレシの使用する道具に伯爵の家紋が付いた。それでもデュプレシの死の直前に和解、その死に立会い、立派な墓を作り一生独身を通した。  
※ペレゴール伯爵は小説ではG伯爵、歌劇ではドゥフォール男爵である。

## 青年アルマンのモデル

デュマ・フィス自身が主要なモデルであるがペレゴール伯爵もモデルの一部になっている。歌劇の第1幕に相当する部分はほとんどデュマ・フィスの経験に基づいている。父デュマ・ペールと旅行中でデュプレシの死に立ち会えなかったのも事実である。アルマンが墓を掘り返すところはペレゴール伯爵に相当する。

※歌劇ではヴィオレッタはアルフレードに抱かれて死ぬ。

## 歌劇「ラ・トラヴィアータ」の背景について

デュマ・フィスの芝居「椿姫」がパリで大当たりをとっていた頃、ちょうどヴェルディは後に後妻となるジュゼッピーナ・ストレッポーニとパリ郊外で同棲していた。「椿姫」を観劇してジュゼッピーナの境遇とマルグリッドのそれを重ね合わせて共感し、歌劇の名作「ラ・トラヴィアータ」が生まれたといわれている。

### ジュゼッペ・ヴェルディについて

ヴェルディが貧しかった少年時代に町の有力者だった商人バレッツィが物心ともに支援しミラノで音楽を勉強させた。そしてバレッツィの娘と結婚させ2人の子供ができた。バレッツィはまさに大恩人である。ところが2人の幼い子供が相次いで病死し、続けて妻も病死してしまった。失意のどん底にあったとき、ヴェルディの最初のヒット作「ナブッコ」の初演で主役を歌ったスカラ座のプリマドンナ、当時歌手を引退してパリで音楽教師をしていたジュゼッピーナがヴェルディを励まして同棲するにいたった。



### ジュゼッピーナ・ストレッポーニについて

ジュゼッピーナは、ミラノ音楽院で優等の成績を収めた。オペラの共演者やスカラ座の支配人達と関係して少なくとも3人の私生児を生んだ。その後40歳近くなっても垢ぬけしないヴェルディに出会った。

上述のようにパリ近郊でヴェルディと同棲するに至ったがヴェルディの故郷では当然白い目で見られ長い間村八分状態だった。

1853年の「ラ・トラヴィアータ」初演後、1859年になってヴェルディと結婚し後妻となった。ヴェルディ45歳、ジュゼッピーナ43歳のときである。その後のヴェルディを献身的に支え続けた。現在も世界でただ一つ存在する、年老いた音楽家が共同で生活し、人生を全うするための「音楽家憩いの家」を二人で設立した。



## 補足

歌劇「ラ・トラヴィアータ」には椿はでてこない。日本で歌劇の名称に「椿姫」を用いることになった経緯は不明である。日本ヴェルディ協会は歌劇の正式な名称を「ラ・トラヴィアータ」としている。